20005

BK領域にて可動式Micro catheter(以下：可動式MC)が特に有用であったの2用例より検討

[1]高邦会　福岡山王病院

山本　泰範[1]、大畑　善治[1]

【概要】Sumius社製可動式MCを開発段階から使用する機会があり有用であると示唆された症例より検討する。【背景】症例1：69歳男性、両側CLI(複数回EVT歴有り)、OMI、PCI、HD、DM。症例2：65歳男性、ASO(CLI)、CKD、DM、HT。【手技/結果】症例1ではATA Distalは何度もEVTを施行しwire不通過であった。この病変に対して可動式MC back upにてwire cross成功。血管走行に対して角度を調節する事でwireの力を確実に伝える事が出来た為と示唆。ATAをPOBAしATAの改善を確認。症例2ではATAとPeronealに発達した90度の副側血行路。通常ではwiring困難と思われる角度であった可動式MCの角度を固定しwiringを成功。逆行性にwiringをする事が出来た。順向性にwire crossするもwire合流できなかったが、ATAと副側血行路にPOBAし開大を確認する。【考察】可動式MCは血管走行や断端に対して角度調節が出来き、wireの力を選択的に伝えると示唆される。BK領域では可動式MCは通常のMCと異なり角度調整が出来ることでsupport性が増し通過困難症例にも良好な成績を得る事が出来たと考える。【結語】現在まで10例程度の使用であり、可動式MCがBK領域の全ての病変に対して有効であるかは検討が必要である。術者側の解剖学の習熟性と操作技術が一致していないと分岐や閉塞病変に対して適切なapproachが出来ない、また、血管走行を読み違えによる角度調節などで血管内損傷を起こす可能性は存在すると示唆。しかしBK3分岐の断端の角度調整などは有用であると考えられ、BK領域において有用な選択肢の1つであると示唆できる。